

報 医 世 々



目 次

- 巻頭言 「最終兵器と木刀と」
気仙医師会会長 滝田医院 院長 滝 田 有… 2
- 理事会報告…………… 3
 - 平成26年度 第4回理事会報告…………… 3
 - 平成26年度 第5回理事会報告…………… 5
- 随 想
「最近ふと思ったこと」
岩手県立高田病院 小児科 大 木 智 春… 7
「とりあえず歩こう～パート2」
星こどもクリニック 院長 星 篤 樹… 8
- 医院紹介……………いとう耳鼻咽喉科クリニック
院長 伊 藤 俊 也… 8
- 県立病院各科紹介
岩手県立大船渡病院 眼科 科長 石 川 陽 平… 9
- 新入会員の紹介 ……………12
- 事務局日記 ……………13
- 編集後記 ……………14
- 表紙のことば ……………14



第 1 3 2 号
2015. 1 . 30

気 仙 医 師 会
岩手県大船渡市盛町字内ノ目6-1
TEL:0192-27-7727 FAX:0192-26-2429
<http://kesen-med.or.jp/>

言 頭 卷



最終兵器と木刀と

気仙医師会 会長
滝田医院 院長
滝 田

有

今年も多くの年賀状をいただいた。万一欠礼があった方にご容赦いただきたい。

開業する前に共に働いた某科の医師からの一枚の賀状が気になった。曰く「一内の医者は最終兵器だ」と。

一内とは旧第一内科。循環器、呼吸器を専攻する私の出身医局である。医療を病魔との闘いと捉えての多分褒め言葉なのだろうけれども、その反面アグレッシブな治療を擲擧しているようにも取れる。勤務医時代の私も、患者さんの最期まで諦めずに治療をした記憶がある。

今、開業医の私はどうだろう。昔に比べ諦めが早くなった。具体例を挙げれば長くなるし問題も生ずるので、自嘲を込めて最終兵器の対極にある一本の木刀とだけ言う。

七年前の今時分、私はくも膜下出血で倒れた。「死なない程度の中途半端な大病をした医者は名医」、かの日野原先生は言う。最終兵器より木刀の方が病人の気持ちがわかるのかもしれないが、大病をしたから皆が木刀になるわけでもない。

勤務医時代に比べて患者さんの近くに居る感覚が強い。家族や家庭環境までわかることが多い。知らなくとも地元の職員が教えてくれる。これを「全人的医療」というのか。

在宅医療や多職種連携は結構だが、あまりに肩肘張りすぎだ。昔の田舎医者は平然と往診をしたし、人望があれば人は集まる。最終兵器より人の息遣いを計る木刀で結構。

お上が唱える理想の医療とは田舎医者は須らく木刀状態に戻れという事だろう。たまには通常兵器くらい欲しくなるが木刀で我慢しろということか。

ただ、理想とされている英国のG P制度には問題が多い事を肝に銘じるべきだろう。

最終兵器は誰が使おうと戦果は同じだが木刀は使い手に拠る。

随 想



最近ふと思った事

岩手県立高田病院 小児科

大 木 智 春

岩手県に来て今春で13年になります。もうそんなになるのかなという思いと、あっという間の12年という思いが入り混じっています。最初の1年は何とか頑張っても、長くても3年くらいで医局から呼びもどされるかもしれないと思っていました。その間に東日本大震災を経験し、自分自身が被災者となり、避難所と仮設住宅で3年間過ごすことになりました。私自身は岩手県出身ではなく、ましてや東北の出身でもないのですがこの十余年という年月は忘れがたいものとなりました。そして震災を経た今ではまわりの支えがあったからこそ、今があるのだと感謝の気持ちを実感することができます。

10年くらい前になりますが、前回は氷上山と岩手の山について書かせていただきました。その氷上山にも既に十数回登りました。県内の山では一番登っている早池峰にはその倍くらい行っていると思います。気仙の最高峰の五葉山にも十回近くは行きました。岩手県内の山に登った数だけ見てもいい時間を過ごしたと思います。残念ながら震災後はあまり山には行っていませんが、もう少し気持ちが落ち着いたらまた行きたいと思っています。

ところで、今私が乗っている車はフォルクスワーゲンのゴルフという車です。そうは言っても現行のものではなく20年くらい前に生産中止になった2代目のゴルフです。(現行は7代目になります)。以前乗っていた車は津波で流されてしまったため同じ2代目のゴルフを探してもらいました。ただマニュアルミッションで頼んだため、なかなかガソリンエンジンのモデルが見つからず、ディーゼルエンジンの車になりました。しかもチョークボタンまでついていました。(現在の車は全てオートチョークです)。幸いにもパワステアリングはついていました。という訳で普通の人から見ればかなりマニアックな車です。(自分ではそれ程とは思っていませんが)。たまたま研修医時代にヤナセのディーラーで見てデザインが気に入ったのです。1代目と同様にイタリア人デザイナーのジウジアーロがデザインしています。国産車でいえばその当時、いすゞの117クーペやジェミニがジウジアーロのデザインでした。当時は新車で買えるほどのお金もなく、5年落ちの中古車を購入しました。結局その後も買い替えることもなく、津波で流されるまで乗り続けていました。

たぶん、ものを大切に使い続けるというよりはものを捨てられない性分が影響しているのかもしれない。

震災前後で人生観も変わったと思うのですが、捨てられない性分はあまり変わっていないのかもしれない。変わったことといえば定期的に実家に帰るようになったことがあります。自分自身も両親もいつ突然死ぬことになるかわからないと思うようになったことと両親の体調、病気のことも影響していると思います。今まではあまり気にすることもなかった自分の死を意識するようになったこともあるかもしれません。突然の同級生の訃報を聞くと自分もその一人になっていた可能性もあったかなと思ってしまいます。震災の記憶はおそらく墓の中まで持って行くことになるのでしょうか、自分の中でどこかで折り合いをつけなければならないのでしょうか。(いつも自分に言い聞かせている言葉です。)

こういう思いになるときは決まって、長崎で聞いた原爆体験のはなしや祖母から聞かされた関東大震災、東京大空襲の怖い話を思い出します。そして話をしてくれた被爆者の方々や祖母はその体験を乗り越えようと戦っているんだと子供の時に感じたことを思い出します。昔聞いたことを時々思い出しながら私も自分で自分自身を納得させているのでしょうか。

3年前に幼稚園の時に住んでいた千葉県の船橋市に行ってみました。船橋の津田沼というところから新京成電車に乗って高根公団という駅で降ります。住んでいたのは今から40年以上前で大阪万博が開催されるよりもう少し前でした。その当時は斬新なデザインであった二階建ての公団住宅ですが、当時の面影は見る影もなく廃墟になっていました。それも一年後には取り壊される予定とのことでした。日本列島改造論という言葉が飛び交っていた時代だったと思います。時代の流れを実感せずにはいられませんでした。最初は懐かしさも手伝って行ったのですが、現実は違いました。ほんの少しでも元気をもらおうと思っていたのかもしれませんが、安易な慰めを期待してそれを裏切られたような気分でした。しかしながら結局は現実の世界に戻るしかないなと思いました。

それからさらに3年以上が経ちますが高田の風景はまだ工事現場のようです。震災復興にはまだまだ多くの時間がかかるでしょう。両親の健康状態のこと自分自身のこと等未来のことは全くわかりませんが、本設の高田病院完成まではみんなで力を合わせて頑張らなくてはならないなと思います。これからどうぞよろしくお願い致します。

とりあえず歩こう～パート 2

星こどもクリニック 院長

星 篤 樹

人間ドックの結果に衝撃を受け、ウォーキングを始めたのは今から7～8年ほど前。当時はまだ震災前で診療所の2階に住み、ほとんど運動をしないどころか歩かない生活でした。こりゃいかん、と昼休みにウォーキングを開始。元JR大船渡駅裏をスタートしてほぼ

線路に沿って歩き、岩渕先生の診療所前を通過して、海の星幼稚園付近でUターンし帰ってくる30分弱の道のりでした。時々さぼりながらも何とか習慣となり、距離を少し延ばそうかと思いましたが昼休み中にこれ以上の時間をかけるのは無理。そのため同じ時間の中で負荷をかけようと、手足に重りを付けることにしました。エベレスト登山で有名な三浦雄一郎氏のトレーニング方法でもあります。最初は両手に500 gずつ、両足に1 k gずつから始めました。最初は思った以上に足が前に進まず、道路横断中に車に轢かれそうになったこともありました。それでも徐々に体も慣れ始め、3か月位毎に負荷を増やし、最終的には両手に1.5 k gずつ、両足6 k gずつまで増量しました。そんな中で震災が発生、仮設診療所生活が始まり当然ウォーキングも中断。ところが逆に痩せようとも思ってもいないのに体重は減っていく。あまり感じてはいなかったのですが、振り返ると当時はやはり精神的にまいっていたのでしょうか？不安になり、生まれて初めて体重を増やそうとむりやり食事をしました（今思うともったいない、そのまま痩せときゃよかった）。ところが徐々に元の生活を取り戻すうちに、当然のごとく体重は増え始め、以前は血中脂質だけの異常だったのに血圧も血糖も怪しい数値になりウォーキングを再開することにしました。震災後は住居と診療所が離れているため片道15分弱の通勤・帰宅時間もあてることができ、昼休みは晩御飯の材料やつまみを仕入れに往復約30分（買い物時間込み）のスーパーまで。重りは少し減らして再開して徐々に元の重さに戻し、新しくウォーキングポール（スキーストックみたいなもの）も取り入れました。ポールは上半身の運動量を増やしてくれるとか、確かに汗の量が増えたような気がします。これで休肝日をもう少し増やせばいいのですが、一人時間が長くなり映画やNFLなどを見ているとついつい一杯。時々体重計に乗り、自宅で血圧と血糖値を時々測り、この位ならいいかということにしています。今後は合併症のないチョイデブを目指して続けていきたいと思います。朝・昼・夕方に猪川町界隈で棒をつきながら歩いている男を見かけたら温かい眼で見守ってください。

ちなみにウォーキングだけでも意外と体力はつくもので、実感したのはTDS。開門と同時にトイストーリーマニアに向かってダッシュ、結構な距離でしたが以前より楽に走れることにちょっと驚きました。なおTDL・TDS共にパーク内を走ることは禁止されていたようです、もうしません。



医 院 紹 介

いとう耳鼻咽喉科クリニック 院長
伊 藤 俊 也

23年前に耳鼻科常勤医として大船渡病院に赴任し12年間勤務の後、現在の猪川町に開業いたしました。私の出身は盛岡市で大船渡には縁もゆかりありませんでしたが、長く住んでいると色々な方とお付き合いが生まれ、徐々にこの土地への愛着が湧いてまいりました。一人科長としての限界を感じ始めていた40歳の頃、後輩や周りの先生方が次々と開業していく中で家族共々懇意にしていた遠藤稔弥先生が当地で開業されたことがきっかけとなり、お世話になったこの地での開業を決意しました。えんどうクリニックのお隣に開業の地を選んだのもそれが理由です。いわゆる落下傘開業の形となりましたが、お陰さまで昨年5月に丸10年を迎えることができました。

縁もゆかりもないと書きましたが、実は県職員をしていた私の父が一時期大船渡に在住しておりましたし、高校教員をしている兄が私の赴任当時大船渡高校に勤務しておりましたので全く縁がないわけでもありません。高校時代最後の高総体県大会が大船渡だったので思い出もあります。まさかこの地で開業するとは夢にも思っておりませんでした。

現在当院の診療スタッフは事務2名、臨時を含めた看護師4名、専従の聴力検査技師1名の体制で診療を行っています。水曜には補聴器、木曜には睡眠時無呼吸症候群の専門外来を設けています。水曜午後は主に気仙管内の学校検診を行い、月末には住田地域診療センターの出張に当たっています。

開院当初から電子カルテを導入し、レントゲン検査もCRで単純撮影のみを行いフィルムレス化を図っています。CT、MRI等は大船渡病院に検査を依頼しておりますが、近い将来気仙地区でもICT導入により画像検査の利便性が向上できるも

のと期待しています。

勤務医時代は外科医として当然手術を手がけておりましたが、開業後はリスク管理の難しさから外来でできる簡単な手術のみを行い、入院の必要な患者様は内陸の基幹病院に紹介し手術をお願いしている状況です。

アレルギー科も標榜しておりますが、気仙スギの産地である当地は全国でも有数のスギ花粉大量飛散地となっており、その対策のため毎年継続して花粉飛散数の計測を行い情報提供しています。尚、今年度から当院でも舌下免疫療法を行う予定です。

耳鼻科は小さなお子さんからお年寄りまで幅広い年齢層の患者がこられます。お子さんには待ち時間退屈しないよう広めのキッズコーナーを設けており好評です。耳鼻科は狭くて見づらい部位を扱いますので、診察室の左右に2台のモニターを配置して顕微鏡やファイバースコープの画像を見せながら、本人はもとより保護者、付き添いの方にもできるだけわかりやすく説明するよう心がけています。

大学時代の主研究領域であった聴覚分野では、特に急性感音難聴の聴力改善に力を入れておりますが、震災後ストレス増加の為か突発性難聴やメニエール病などで不調を訴える患者さんが増えてるのがとても気懸りです。



話は変わりますが、研修医制度がスタートしてから、残念なことに耳鼻科を志す医師が減っており、その煽りで地方に行くほど耳鼻科医不足が顕著です。大船渡病院を含め岩手県沿岸の県立病院は耳鼻科の常勤医が皆無で、久慈、宮古、釜石、そして当地に開業医が1軒ずつあるのみです。隣県の気仙沼市に至っては耳鼻科開業医がゼロという状況です。常勤医不在により夜間休日の救急外来では鼻出血やめまい等の対応に苦慮されていると思いますが、できるだけ当院でも緊急対応して行きたいと思っています。

県沿岸南部の耳鼻科医療を守るべく、これからも連携を大切にしながら地域のお役に立てるよう最善の努力をしていくつもりです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



県立病院各科紹介

岩手県立大船渡病院 眼科 科長

石 川 陽 平

気仙医師会の皆様、日頃より大変お世話になり
深謝申し上げます。

今回は、この場をお借りして県立大船渡病院眼科
の紹介をさせていただきます。

まずはじめに、簡単ではありますが私の自己紹介
をさせていただきます。生まれは盛岡市で、1
歳から父の実家のある静岡県で育ちました。実家
は昭和36年に眼科を開院しております。大学入学
で再度盛岡に戻り現在まで岩手で過ごしています。
平成16年に岩手医大を卒業し、平成24年1月から
県立大船渡病院眼科で勤務させていただいており
ます。

当科は常勤医1名、視能訓練士3名、看護師1
名、看護補助者2名、医療クーク1名で診療に
あたっています。

主な疾患について、新生児は未熟児網膜症、乳幼
児は斜視、視力障害（遠視、近視、弱視等）、若
年者はアレルギー性結膜炎、コンタクトレンズ処
方、高齢者は白内障、緑内障、網膜静脈閉塞症、
糖尿病網膜症等、そして年齢に関係なく各種外傷
（角膜異物、眼球打撲、眼窩底骨折等）も少なく
ありません。また全身疾患に伴うぶどう膜炎（サ
ルコイドーシス、ベーチェット病等）や視神経疾
患（多発性硬化症に伴う視神経炎、腫瘍に伴う鼻
性視神経症、頭蓋内疾患による視野異常等）甲状
腺眼症、膠原病関連疾患などもあり、他科の先生
方との連携が必要なことも多数あります。

外来一般診療は、月・水・金は午前診療、水・木
が午後の診療日となっており、火曜日は隔週で岩
手医大勤務となるため休診日としています。月曜
午後と木曜午前は手術を行っており、一般診療
以外の時間帯は完全予約にて検査や外来手術等
を含む診療を行なっています。当科は院内で内科、

泌尿器科に次いで3番目に外来患者数が多く、1日の外来患者数は約70～130人、現在は岩手医大からの応援医師の派遣はなく、一人で診療している状況です。特に月曜日は、午後に手術を控えているためペースを上げて診察しなければなりません。かなりハードではありますが、外来スタッフが事前に問診を詳しく取り、それを基に視能訓練士が必要な検査をひととおり行ってくれるため、他院での診療に比べると非常に診療しやすいと感じています。平成25年度から視能訓練士が1名増員し3名となり、医師が少ないぶん、外来検査をサポートしてくれています。また、平成24年度から当院は電子カルテが導入され、同時に当科も眼科専用の部門システムを導入しました。導入から約2年が経過した今はだいぶ慣れ、診療が充実かつスムーズに行なえるようになりました。

手術についてですが、当科では週2回、月曜の午後と木曜の午前に各5件ずつ、白内障手術については2泊3日の入院で行なっています。平成26年1月～12月12日現在までの総手術件数は524件、そのうち白内障手術は302件でありました。震災後から白内障手術希望の患者が当科へ集中したこともあり、一時期手術予約が6ヵ月後まで埋まることもありました。平成26年12月からは予約待ちを挽回すべく各6件ずつに手術件数を増やし行なっています。

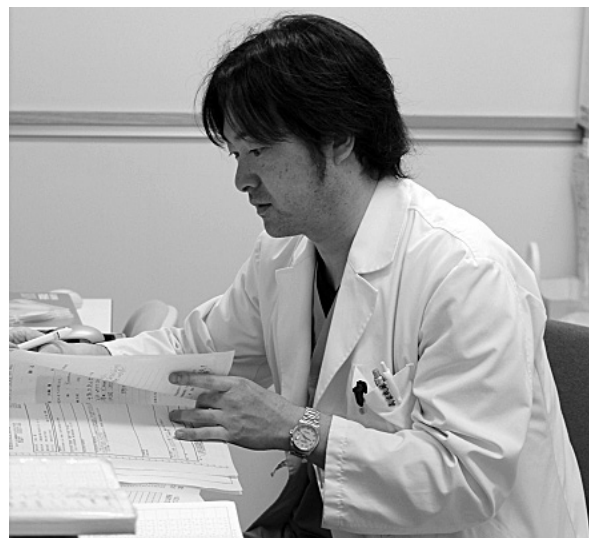
気仙医師会の先生方からはたくさんの患者紹介を頂き、大変感謝しております。

引き続き地域の先生方との連携を深め、地域の皆様に少しでもお役に立てるよう努めて参りたいと思っております。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

眼科の診察日のお知らせ

	受付時間	午前	受付時間	午後
月	10：30まで	診察	なし	手術
月:午後手術のため受付人数が多い時は時間前に締切る事があります。				
火	休 診			
水	10：30まで	診察	13時～15時	診察
木	なし	手術	13時～15時	診察
金	10：30まで	診察	なし	検査

*都合により変更することがあります。眼科外来までお問合せください。



新 入 会 員 の 紹 介

岡 野 継 彦 先生

入 会 日 平成26年 8 月 1 日

生年月日 昭和44年 6 月26日

出 身 校 岩手医科大学

勤 務 先 県立大船渡病院